大学出版

'95 冬

No. 24

大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses

大学出版部協会

大学出版
24号

Winter・1995

読書の周辺　人文科学とコンピュータ ―――― 平野　秀秋　1
読書の周辺　最後の葡萄摘み ―――― 佐々木　翠　8
大学出版部協会の一九九四年夏季研修会報告 ―――― 関野　利之　12
大学出版部ニュース ―――― 14
新刊案内'94・10～'94・12 ―――― 20
製作の現場から ―――― 表3

表紙イラスト　ヨースト・アマン『職人図鑑』より
大学出版部協会マーク・デザイン　道吉　剛

■読書の周辺

人文科学とコンピュータ

平野　秀秋

1　電子タイプライターとしてのコンピュータ

十数年昔、コンピュータとコミュニケーションを主題にした論考を依頼された。そのころすでに、あたらしければ飛びつく日本の論調では「電子メディア社会」到来論が当然のように喧伝されていたが、わたくしはとてもその種の論議に手放しで参加する気が起きなかったので、その時点でコンピュータが日本社会に残すものは一世紀遅れた「タイプライター文化の定着」であろうと指摘した。一八七〇年代半ば、米国のレミントン商会が最初の実用タイプライターを発売したのがタイプライター文化の始まりである。以来欧文文化圏で文章用具としてのタイプライターが不可欠の道具となった。フィリップ・マーローのような私立探偵が自分で物憂くタイプライターの鍵盤を叩く情景が、出現する。今日では飛ぶ鳥落とす巨大コンピュータ企業であるＩＢＭでさえ、社名のＢとＭは「ビジネスマシーン」。早い話がタイプライター屋である。そうした歴史を考えたうえでの一世紀遅れ、という意味である。

この予想は結果論として大きく外れなかった。それだけに、コンピュータの助けを借りたわが国のタイプライター文化の普及は実にめまぐるしかった。ワープロが使えなければ居心地が悪いような風潮は過去のものとなり、いまやＬＡＮと電子メールを使わざれば人にあらずといった風潮である。この種の論調に接すると、与えられた主題を考えるのにどこか気が重い部分がある。誤解がないよう申し添えるが、わたくしはこの主題の意義の重要性は痛感しているつもりである。また自分では一九七〇年代なかば、スタンフォードの学生が納屋で組み立てたゆえに箱を開けると野兎の糞が転がり出す、という伝説とともに登場したパソコンを自分用に使用しはじめて以来、社会学者として人並みより少しは多くコンピュータを研究用に利用しているつもりである。しかしなお、人文科学とコンピュータという主題を前にして、センセーショナリズムに傾きやすい論調に加わりたくない気持ちが先に立つ。コンピュータで人文科学が変わるくらいなら人文科学者など必要ない。コン

ピュータの社会への定着のさせ方を考えるほうがよほど人文科学者の使命ではないかと、皮肉ではなくいいたくなる。

とはいえ、日本という世界でも屈指の文字の豊かな国への遅まきのタイプライター文化の定着は、やはり重要な転機ではあった。これが前提にあるからこそ、そもそも人文科学とコンピュータという主題も成り立ちうるのだろう。だがここにいたる途上で、日本版タイプライター文化は多くの無視できない問題点も露呈させた。

2　コンピュータ文具の不合理

人文科学とコンピュータという問題設定は、ある面でそろそろ無意味になりつつある性質のものである。コンピュータの登場後に出現した若干の特定研究分野を除けば、コンピュータがなければ研究ができないなどということは過去も現在もいささかもなかった。その点では人文科学も自然科学も同じことである。と同時に、コンピュータ技術の趨勢と利用形態そのものが、分野の区別を問題としない方向を志向している。コンピュータの本質が超高速反復計算にあることは誰でも知っている。しかし先述のようなタイプライター文化の定着もあり、計算という本質をできるだけ水面下に押さえたコンピュータ利用が分野を問わず滔々と進行しつつある。あらゆる応用ソフト分野が、機械がせっせと計算している姿はおくびにも感じさせず、ひたすら視覚化と簡便操作をめざそうとしている。これには、冷戦の終焉と米国の軍事予算大幅削減という意外な要因が拍車をかけている側面も実はあるのだが、それはそれとして、いまやコンピュータを自然科学者が使おうが人文科学者が使おうが、視覚化と簡便化という趨勢にはほとんど差はなくなりつつある。ひとことでいって、コンピュータはようやくフィリップ・マーローの文房具と化し、研究室なり書斎なりに不可欠の多目的の道具になったのである。ありようは、やっとペンや鉛筆並みになったということだ。そう考えると、ここにいたるまでに道具のユーザーとして要望すべきことが多々あったことに気づく。また同時に、ハイテク道具なるがゆえにコンピュータ文具の世界だけにまかり通っている不合理がいまなお結構あることにも気づくことになる。

第一に外回り。スイッチや形が違う程度は、個性として甘受できる範囲だが、キーボードの違いとなると問題がなくはない。多くのソフトは機能をキーに割り付けるから、割り付けの約束が一々変わる。個性を主張したいメーカーの意図は理解できるが、それにしても世の中に一種類のキーボードしかなかったらどんなによいことかと思う人は少なくない。機械を買い換えるとたちまちそれを痛感させられる。その買い換えなるものが、計画的陳腐化という浪費が常識のハイテク分野では頻繁に起きる。

もっとも外回りの相違は全体としてはなんとか我慢できる範囲に落ちつく。それというのも実は一世紀に及ぶタイ

プライター文化のおかげである。現行のローマ字キーボードの主要部分を、キーボード文化が社会的淘汰によって作ってくれた。この歴史が、せめてキーボードの主要部分だけは勝手な配列になることを免れさせている。

第二に内回り、すなわち内部構造。なかでもユーザーに直接関係する部分はいわゆるＢＩＯＳやファイルの内部形式である。Ａ社用のソフトはＢ社の機械に乗らない。ファイルの互換がとれないのはさらに困る。どこの世界にＡ社の鉛筆の字はＢ社の消しゴムでは消えない、などという話があるだろうか。上記の外回りと内回りが重複し合ってどうにもならなくなっている典型的事例が、日本語ワープロ専用機の世界であろう。だがコンピュータにもこうした自慢にならない事情がなお大いに残っている。

「スーパー光ハイウエー」を語ろうという時代に、こんな不合理があるのは想像するだに困難である。にもかかわらずこうした野蛮きわまる習慣がまかり通ってユーザーを悩ませるのも、一つにはコマーシャリズムの弊害であり、企業経営制度の矛盾であろう。企業制度は日本社会の一部分でもあり、さらに企業競争には価格低減というプラス面もあるから安価で独自性ある製品開発は歓迎される。だがユーザーにツケが回る性質の開発ならやってくれない方がよい。人文科学と否とをとわず、研究者はコンピュータなどなかった時代から営々と研究をしている。コンピュータが出現したから研究が進むなどと考える必要はすこしもない。輝かしいハイテク時代にこのような初歩的な不合理を指摘するのは本意ではないが、これが現実である。

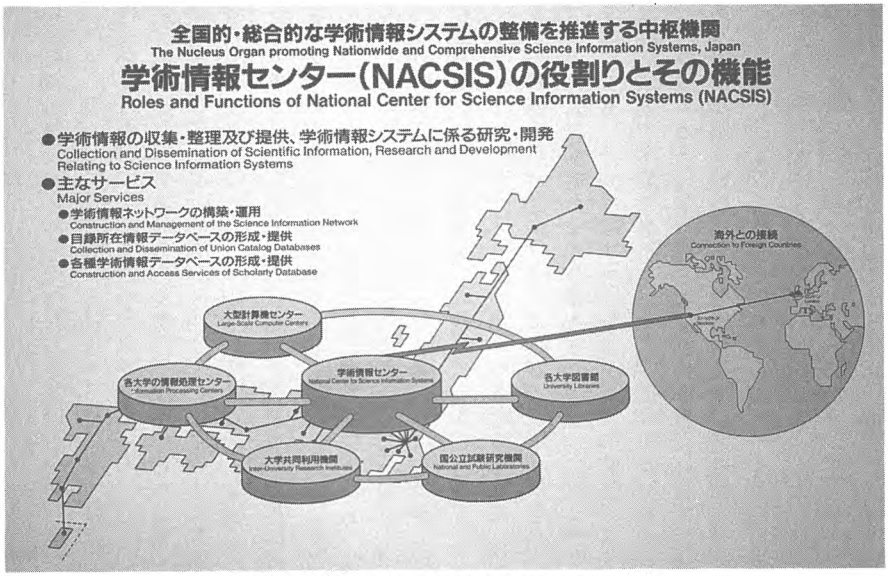
先進国の中にありながら、日本ではユーザーの発言はどの商品にかんしても決して強くない。コンピュータのこんな現状にもユーザーの責任はあるということは、当然考える必要がある。ユーザーの責任のなかには、高価なソフトは買わない、デファクト・スタンダードになった標準テキストファイル以外は原則として使用しない、などの自衛のための受動的責任の行使もある。しかし、ユーザー層として主張すべきことは主張するという、能動的責任の行使も含まれる必要があるだろう。

ここ数年の間に、ＰＣ互換機の進出に象徴される経済現象としての市場開放圧力と、それにともなうユーザーの発言が多少ずつでも強くなりつつあることとのせいで、これらの事情は遅々とではあるが改善されつつあることは事実である。しかしなおかつ人文科学とコンピュータという主題にかんしては、私見ではこのような初歩的な問題に目を向ける方がいまなおはるかに重要度が高いと考えられる。

3　ニューメディア・データベース・データ通信

あたえられた主題は、当然ながらデータ通信の普及、データベース、ニューメディアの出現、などの問題に触れなければ終わることができないであろう。

すでに日本で相当普及した商用ネットの最大の功績は、データ通信の普及よりもむしろ、ユーザーの意向を集約し



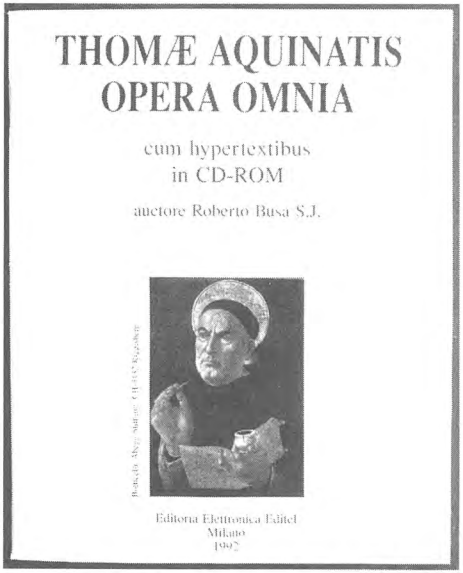
文部省学術情報センターの展示より（同センター提供）

社会的に反映されやすくすることに寄与したことにあったと、わたくしは考えている。米国ほどではないにしても、わが国の商用ネットにも前述のような不合理を指摘する世論が開設と同時に流通しはじめた。こんにちでは意見交換だけでなく、せめて会員同士の相互協力によって隘路を打開する目的で、おびただしい数のフリーソフトやシェアソフトが商用ネット上で交換されている。

とはいえ、わが国では商用ネットがデータ通信の普及への道を切り開くのに功績があったのもまぎれもない事実である。すぐそれに続いて文部省学術情報センターのオンライン・サービスが開始されたし、また米国で実用化され日本にも急速に普及しはじめた「インターネット」の出現などが注目されはじめた。これらが、人文科学の分野でも歓迎すべきもう一段あたらしい道具の登場となりうることは間違いない。この問題に関連して社会学会に例を取れば、最近も学会誌上で金城大学の鮎川潤氏が海外学術交流の経験をもとに、学術情報センターの利用を通じて海外研究者と学術的意見交換や情報検索を行うことの計り知れない有用性（鮎川氏は利便性の大きさから生じうるデメリットを研究者が自覚する必要性も正当に指摘されるが）について簡潔な論文を発表しておられる（『ソシオロジ』一九九四年五月号）。他の学会でも同じような報告があると考えられるので、具体的なことはそれらにゆだねるとして、ここでは関連深いわたくし個人の別の方面の体験を紹介させて

いただく。

近代社会の出現に関するある研究プロジェクトの推進のために、今年度から文部省科学研究費補助の恩恵に浴すことができた。その結果幸いにも、かねて注目してきたロベルト・ブーサの「インデックス・トマシク　CD－ROM版」の購入が可能になった。その包装を開いたとき、ある強い感動を禁じることができなかった。ブーサがアクイナス全集とコンコーダンスの電子化に着手したのは一九四六年である。その実に三年後に、IBM機械とパンチカードを使用した電子版の製作がすでに開始されている。一九四九年は、真空管式エニヤック計算機の出現から数えてさえまだ三年しか経っていない。エニヤックには人文科学にも関連深い多くの夢が託された。自動翻訳、自動作曲、自動作詩などはその一部である。そのあるものは基礎研究の結果可能性が否定されたし、あるものは構想のみに終わった。ブーサのこの企画も、そのような夢の一環だったはずである。



「インデックス・トマシク　CD－ROM版」

しかしこのプロジェクトは夢に終わらなかった。理由の第一にあげられるべきは、アクイナスというあらゆる人文科学が決して避けて通れない学問的巨星の全集を電子化しようと意図した、公共性豊かな、雄大にして緻密な着眼にある。しかし同時に忘れてならないもう一つの大きな理由は、この「精神科学における世界最大のコンピュータ・プロジェクト」を半世紀近くにわたって中断なく支援し続けた学会（イタリア言語自動分析センター）とIBMならびにイタリアをはじめとする各国の多数のソフト開発企業の協力体制である。これこそが人文科学研究というものであり文化事業というものだという、圧倒的な実例を提示された思いである。

この企画は以降ピサ、ミラノ、ウィーン、ローマ、コロラド州ブールダーなど世界各地を巻き込んで間断なく継続され、三〇年後にテープ形式で学術研究用に無償提供されるにいたった。やがてマルチメディアの出現とともに、最終的にはこれまたデファクト・スタンダードというべきハイパーテキスト形式に集約され、ファイル圧縮してCD－

ＲＯＭ一枚に収録されたものがドイツの学術出版社フローマンを通じて公表・発売された。こうして世界中のあらゆる分野の研究者がただちに利用可能となった。その威力にコンピュータならではのものがあることはいうまでもない。熟語検索も一例である。検索入力語の格が何格であろうが、入力された語のあらゆる組み合わせに適合する収録熟語を、これまた格を問わず何百通でも直ちに一覧用ファイルに作成してくれる。コンコーダンスに必要な他の性能もすべて十二分に完備している。

他に同じく雄大なものとして、一九世紀のミーニュの編纂になる『教父全集』のうち前半全二二一巻をＣＤ―ＲＯＭ五枚に収録した『ラテン教父データベース』などがある。ヨーロッパでは概して、大学・研究機関を中心としたこのような大型電子テキスト・アーカイヴが二〇年以上前からすでに実用開放されている。イギリスのオックスブリッジの電子アーカイヴもその一例であろう。ヨーロッパが成熟した先進地であり、大学・研究機関の社会的位置づけが明確であることを認識させる。

一方米国は、わたくしの知るかぎりこの種の分野では多少遅れている。学術研究が国防予算に依存させられた冷戦時代の影響が陰を落としているのかも知れない。しかしその反面、政府・公共機関の情報公開を目的としたデータベース、定期刊行物書誌情報データベース、新聞・雑誌記事データベース等は充分に進んでおり、とりわけこれらのオンライン提供に大学・研究機関が積極的に関与して多数のネットワーク網を形成している。そこに、言論の公開と流通に最大の関心を払うアメリカン・デモクラシーの肯定面が見いだされる。近年最大の話題である「インターネット」も、こうした社会的背景があるからこそ、おびただしいネットワーク間の国境を越えた連携・協力構想として出現しえた。その意味で、これはアメリカの草の根デモクラシーの表現でもあろう。だからこそ、副大統領ゴアが掲げるスーパー光ハイウェー構想も、軍事予算削減に代わる公共投資先という現実は現実としても、そのなかにある種の理想主義を感じ取ることもできるのである。

日本の現状は、残念なことに上記のどの要素もそれなりに存在しまたは機能しているが、そのどれもがそれなりでしかなく、顕著な個性が見られない。

といって、だから今後ますます推進するのが当然だということには、直ちにはならない。コンピュータがなくとも豊かな暮らしはできるし、その方が優先するという選択もすべき時にはためらってはならないからである。だが、事態がこうは進行しないだろうと感じられることも事実である。ハイテクは、技術が社会的必要を煽り、喚起し、創出するという本質を持つ。よほど成熟した見識が国民になければ、逆にハイテクを抑え込むのは至難である。先述した電子タイプライター文化の定着過程で、日本はことにこの面で弱いことを証明してしまったのである。

4　巨大インフラストラクチャー構築の条件

どうすれば過去の経験を生かせるのかについては、答は一つしかない。わたくしたちは、コンピュータに関連してわが国でいままで存在しなかった大規模なインフラストラクチャーを、かつてなかった速度で構築するという国民的選択を否応なく行なおうとしているのである。電源開発、上下水道、国土開発、道路・港湾建設、社会保障制度などのどれにも匹敵し、ことによるとどれをも凌駕する規模と速度になりかねない巨大な社会資本を、国民の費用で構築しようとしている。それなら、先行者からえた若い経験を思い出し、それを繰り返さぬようにするしかないだろう。あるものは深刻な環境破壊を引き起こした。あるものは産業構造を変え、新産業の創出と同じほどの既存産業の破壊を強いた。あるものは伝統を破壊し新ライフラインに依存しない生活を不可能にした。あるものは政官財の癒着の露骨な温床と化した。そしてそれら全てが、国民の租税によってまかなわれた。またすべてが、いまもなお国民の高額の支出を、弊害の除去のためだけでなく維持そのもののために、要求し続けている。

これらの制度自体が有害といっているのではない。現代の機構・制度はどれも、本質として功罪両面を持ち、そしてほかでもなく、コンピュータの現状はついにこのような規模のインフラストラクチャー形成を要求する段階に達した、といっているのである。ブーサの事例を思い出すまでもなく、データベースはまぎれもなくその用途と目的において社会資本である。関連したニューメディアは、当然にも本来社会資本充実に奉仕すべきものである。それらの上に成立するデータ通信はなおさらにそうである。日本の光ハイウエー計画は概算二〇〇兆円とも三〇〇兆円ともいわれる。わが国公共投資予算の優に一〇年分である。

事柄がそのようであると理解されるからには、いくつかの基礎的条件が提示されるべきだろう。第一に、明確な必要度と優先順位の認識が不可欠である。第二に、費用負担の公平が必要である。第三に、公共部門と私企業部門のけじめが判然とすべきである。そして最後に、起こりうる弊害にかんする監視体制の存在が不可欠である。これらは最低必要なことであり、同時に常時継続して達成されるべき条件である。

以上の最低条件がどうしたら保障できるだろうか。率直にいって従来の審議会方式だけでは、とうていこうした継続的任務にこたえないだろう。一般論として、あたらしい市民的発言主体出現の必要性は深刻である。こうして、冒頭の主題は実は現代日本が要求されているあたらしい成熟した政治社会の創造という主題と、完全に重層していることが判然とする。これは、コンピュータがコミュニケーションの一角を担う以上当然の帰結である。人文科学とコンピュータという主題の核心も、ここに帰着するであろう。

（法政大学社会学部教授）

■読書の周辺

最後の葡萄摘み

佐々木　翠

旅は一人がいい、とつねづね私は思っている。二人の旅も数人の旅もそれぞれによさがあるが、誰かが傍らにいて同じ景色を見たり、同じ空気の中にいるときに、私と同じ感慨を持つとは限らない。その違いを感じるのがわずらわしいことがある。一人ならば自分の好きな方向に自分の感懐を深めることができる。

旅をしていて、一番の収穫だと思えるのは、自分の中にある世の中に対する規律・尺度みたいなものが、少しずつ変えられ、あるいは広がっていくのが判ることである。

旅に出ることと読書をすることには共通項がある。実体験にせよ、疑似体験にせよ、新しい未知のものに接する喜びである。それに付随して日常性からの脱却を図ることができる。旅に出よう、と思う時と、いい本を探して読もうと思う時には、共通した踏み切りがあるように思われる。

最近、年とともに長い小説には内容的にも時間的にも耐える根気がなくなっているせいか、手が出るのはどうしても短い小説になってしまう傾向がある。

ドイツやフランスの小説には、短いけれども鋭く深い感銘を受けるものが多い。そしてこれは映画作品にも共通しているが、物語の始めから終わりまでの時間経過も短いものが多い。フランツ・ヴェルフェルの Die Hoteltreppe（ホテルの階段）などは八ページほどの小品であるが、時間経過としてはほんの二秒ほどである。そのような短縮された時間に凝縮されたテーマ設定の深さと濃さがある。もちろん心理描写のこまやかさと場面設定のトリミングのうまさがその支えになっている。またドイツ、フランスの短篇はロシアやアメリカのものにくらべて翻訳されることが少ないように思われるが、それは他の国の言葉には置き換えることができない、独自の色合いを持っている言葉が、凝縮された表現に点在するからではないだろうか。

Brandrot liegen die Hügel Oppenheims in der Sonne des Nachmittags. Im weichen Dunst der Wiesen, in die sich der Fluß bettet, steht sie, eine kulissenhafte Wand, gegen die Ebene des Ostens,

und die Härte ihrer Formation, der klare Aufbau ihrer Lage, die Kühnheit ihrer Gliederung erinnern an die strenge Ordnung jener römischen Kohorten, die diesem schieferdurchwachsenen Boden nicht nur das Schwert, sondern auch die erste Rebe brachten.

(Die letzte Weinlese: E. Gläser)

エルンスト・グレーザーの「最後の葡萄摘み」という短篇の書き出しである。物語のはじめの部分というのは、たいてい少し（あるいはおおいに）むずかしい。しかし学生のころ読んだこの短篇を、三〇年ほどたった今読んでみて、改めて感動した。

物語は、一人の退役少佐がプロイセンでの戦争で友人を失い、その報告をするためにヘッセンの葡萄園に友人の妻を訪れる。しばらく逗留して、男手のない葡萄園を手伝っているうち、友人の幼い娘が少佐になついたりしたこともあって、その葡萄園に住むことになる。数年後、友人の妻は気がふれてラインに身を投げ、少佐は彼を父親だと思っている娘のために葡萄園の経営をつづける。

場面は、娘が二一歳になる日の午後である。少佐は午後の陽にあたためられたテラスでワインを飲んでいる。娘は二一歳になったら開くようにと預けられた母親の手紙を読み、いままで父親として敬愛してきた人間が、自分の父親でなかったことを知り、彼のもとに急ぐ。

娘が少佐のいるテラスについたとき、少佐は持病の心臓の発作でこときれたあとであった。娘は葡萄園で働いている人々の所へ行って「私の父が亡くなりました」と言う。

少佐は死ぬ直前のワインの酔いのヴェールがかかった意識の中で「私はついに人生というものを持たなかった」と考えていた。「しかし私はドイツの一番美しい地方で人生の時間をつぶした。人間の心というものは多くのことに耐えることができる。それは、戦争や、敗北や、裏切りや、憎しみ、愚鈍さにさえ耐えることができる。しかし、人間の心が耐えることができないたった一つのことがある。それは、何も愛さないということ……」

私にとっては文学研究が専門としては一応本筋であるが、言葉の勉強が常に副次的にともなう。言葉の勉強をしていて、嬉しいと思うのは、むずかしい単語や言いまわしが理解できたとき。また、複雑怪奇、まるでわざと難解に書いてあるみたいな文章を「解読」できたとき。または、言葉を通じて新しいことを知ったとき、自分にとって新しい考え方に触れたとき。またあるいは、古くからの人間の叡知にふれたときなどである。そしてたいへん贅沢ではあるが、まるでバッハの単旋律の音楽の中に身を沈めるように、落ちついた文学作品の世界に没入するとき。

しかし、それらにも増して、さらに嬉しいのはひとつの言葉を通じて、私の心が、私の持っている世界が、解き放たれたように広がるとき。このような言葉、あるいは場面

に出会えたときは、読書の楽しみはまさにここに尽きるという感じさえする。

言葉に関しては名詞とか動詞とかは、ある程度具体性を伴うから、全く判らないということはあまりない。言葉で難しいのは、結局、副詞・形容詞なのではないだろうか。また、名詞・動詞でも、それが形容詞的に使われていると、同じようにむずかしい。

「トンネルを抜けると雪国であった。」という文章を読むとき、「雪国」という言葉に我々日本人は、ほぼ共通したイメージを持つことができる。子供のころ、朝起きたら庭一面に降りつもっていた雪。小学校の校庭に降っていた雪。初冬の雪。みぞれ雪。ボタ雪。雪ダルマ。スキー。そり遊び。手袋、帽子。これらの積み重ねから、私たちの雪国のイメージができ上る。そしてさらには上越国境の雪ふかい地方の景色を思い描くことができる。そこを煙の出る汽車が走る様を思い浮べることができる。ときには、煙のにおいや、寒さやさびしさなども感じられるだろう。

ともあれ、雪国という言葉に持つイメージは、日本人の間では大差はないはずだ。しかしこれを外国人が読んだ場合はどうであろうか。それが日本語であれ外国語であれ、

「トンネルを抜けると雪国であった。」

という文章で、日本人が持つと同じ、あるいはそれに近いイメージを持つことができるであろうか。アラスカの大平原に住む人は、その大平原にしんしんと降りつづく雪のイメージを持っている。その人は汽車に乗ったことがあるだろうか。トンネルをくぐったことがあるだろうか。日本列島の表側と裏側の気候の違いを知っているだろうか。「ふらんすへ行きたしと思へども、ふらんすはあまりにとほし。せめてはあたらしき背広など着て気ままなる旅に出でてみん。」などという気持ちになったことがあるだろうか。

雪国を Snowland と訳そうと、どんなに訳に工夫をこらそうと「雪国」という言葉の持つ日本語のイメージは伝えきれないだろう。この雪国という言葉が、これ一つを取り出せば、一つの名詞でありながら、ここでは一つの名詞をはるかに越えたものを表わしているからではないだろうか。

言葉というのは、それを話し、使っている民族の、生活、習慣、文化、歴史、そのすべての積み重ねなのだ。

百人一首に出てくる烏帽子をかぶって座っている人の足元の畳のへりの紫の色を外国語で表現できるだろうか。金粉をまぶした紫の鮮やかな色。あるいは何年か経ったあとの畳のへりの色あせた紫。日本人なら知っているあの手ざわり、畳のにおい。

また例えば、源氏物語のみやびやかな妖艶な雰囲気。この物語を外国語にすれば、話のすじは伝わってもあの雰囲気までは伝わらないのではないだろうか。ただ単にきらびやかで、あるいはいやらしい印象が伝わるのではないだろうか。あの雰囲気は、日本語によってのみ、あの文体、あ

の言葉遣いによってのみ支えられているのではないだろうか。雪国という言葉とか、源氏物語の雰囲気とかが外国人には判らないということではない。しかしそのためには、日本に来て、日本の山や川の形を見てほしい。出雲大社や飛鳥の寺を見てほしい。日本の汽車にも乗ってほしいし、D－51の写真も見てほしい。北陸海岸の景色や、小雨にけむる松島も見てほしい。それから西芳寺の庭や竜安寺の庭も見てほしい。落語も聞いてほしいし、歌舞伎も見てほしい。ごはんもうなぎも食べてほしい。お線香の匂いも嗅いでほしい。そうすれば判る。

あるいは日本に来ることができなくとも、本や映像を通じてでも、右に書いたことの半分にでも相当することを体験してくれたら、そうしたら判ってもらえる。

はじめに挙げた「最後の葡萄摘み」も、ライン川のなだらかなぶどう山がつづくあたりの景色は、ドイツへ行かずともある程度のイメージを抱くことはできた。そしてそれなりにいい短篇だなあ、と思った。また後年ヨーロッパに旅してライン地方のこのあたりの景色にも何度か接している。それだから、もう一度ひっぱり出して読む気にもなった。

そして……

Brandrot liegen die Hügel Oppenheims in der Sonne des Nachmittags....

最初のこの一行だけで、私は息もつまるほどに感激してしまった。brandrot は辞書には「火のように赤い」とある。「オッペンハイムの丘が、午後の陽のなかに、赤くよこたわっている」と書いてあるのだ。少なくとも学生の頃にはそのように読んだ。

しかし、最初の行の最初の単語でハッと目が醒める思いがした。火のように赤く、だろうか。いや、brandrot の brand は Branntwein の brannt ではないのか。そうしたらこの赤さは「火のように」という赤さではなくて、ぶどうの赤さではないか。陽に透かして見るぶどうの実の赤さではないか。ぶどう山の赤さではないか。

なんとうかつであったことか。

ともかく、この brandrot という副詞を見たときに、私の脳裡に、ライン河畔の、それもマインツから南の、なだらかな、くったりと靄のかかったような、明るい陽射しにあたためられた風景が、燎原の火のごとく広がったのであった。何度か見て、記憶に馴染んでいるはずの景色が、まったく新しい色と雰囲気で浮かび上がった。ぶどうの紅葉、ラインを行く船の汽笛、新しいワインのかおり、風、家々の屋根の色、ゆるやかにたち昇る煙……

そうか Brandrot とはそういう色だったのか。「赤い」とか「火のように」という日本語によってでなく、brannt のような言葉までを含めて brandrot という言葉が読めるとき。たったひとつの単語を読むのに、三〇年もかかってしまった。

（東京農業大学助教授）

大学出版部協会の一九九四年夏季研修会報告

関野利之
（玉川大学出版部）

大学出版部協会恒例の夏季研修会が、静岡県伊東市の光風閣で、九月八日（木曜日）から十日（土曜日）の三日間おこなわれた。北は北海道大学図書刊行会、南は九州大学出版会まで二十大学・六十二名が参集した。

メインの講演会は、岩波書店のニューメディア開発室長・編集部長の合庭淳氏の「マルチメディアと出版」である。氏は『広辞苑』のCD－ROMを例にとりながら具体的にその操作を介して話を進める。

マルチメディアは、文字と音声、静止画と動画の複合された情報をコンピュータを介してリアルタイムで表出する。そのなかで私たち文字情報を主体とする出版社に特に関連の深いものはCD－ROM等による電子出版とこれから本格化が期待されるインターネットなどのパソコン通信であろう。マルチメディアの開発と推進には、関連機器の低価格化とニーズにあったソフトの制作が不可欠である。また、文字文化を電子メディアのなかに生かすも殺すも、パソコンの絶対的な普及と誰しもが認める使い勝手の向上によろう。近い将来、教育・研究・医療・行政の分野、電子図書館などにその成果がでてくるだろう。また、著作権の領域では予測できない事態も出現するであろう。そのためには、電子出版の標準化などの問題も解決しなければならないであろう、と話ははずんだ。

ケーススタディは「北海道大学図書刊行会」の管波秀樹氏が登場した。ケーススタディは、一九七三年の第二回研修会の「法政大学出版局」（報告者・阿部好文氏）を皮切りに十数回つづいたが、この数年休止していた。今回久しぶりに復活しただけに、おおかたの期待に応えるものを準備するだけでも担当者の苦心は一方ならぬものがある。

管波氏は営業畑の現役だけあって、もっぱら編集側とは視点のことなる、営業サイドにおける意思決定を課題に据えた。北海道大学は十二学部を擁し、それが一面出版内容の多面性の要因となり、営業政策における困難を生じさせている、という。営業上の検討様式の紹介をもまじえながら、北海道ならではの地域性の濃厚な企画を三例取り上げ、論を展開した。

合庭氏・管波氏の興味ある報告に、質疑応答の時間も大幅に食い込み、定刻をすぎても終わらなかった。ホスト校の玉川大学出版部の担当者は大いに気をもまされた。三時のおやつには、玉川大学農学部特製のバニラ、コーヒー、抹茶の三種類のアイスクリームが差し入れとして賞味された。夕食後のパーティには、多くの人々が集い、オフィシャルな会とは一味異なる情報の交換に、かなりの時間が贅沢に費やされた。

また、編集部会で起案した「大学出版部協会のリーフレット」コンテストの応募作品が、夜のパーティの間に展示され、皆の感興をそそった。

翌朝、海が近いこともあり、散策に出かける者、日課のジョギングをする者、朝風呂を存分に堪能する者、皆思い思いに食前の憩いをとったようである。

九時からは、分科会である。幹事懇談会、編集部会、営業部会、刊行助成部会の四つの部会にわかれて、十二時までの持ち時間を、部会の個性に応じてじゅうぶんに討議が尽くされた。

編集部会では、『大学出版』の今後、学術書・専門書のブックデザイン。営業部会では、三十周年ブックフェアの最終報告、第四回地域研修会（関西地区）、『大学出版』の効率的利用法。刊行助成部会では、刊行助成アンケートの集成、日本生命財団審査基準の明確化の確認。等が主題であった。

午後のトピックスは、「学術書の流通問題」について東京大学出版会の大江治一郎氏が話題を提供した。

現行出版業の再販制度・委託制度を前提に、いくつかの論点を整理して見せてくれた。(1)書店のSA化、POSレジ・EOSの普及、出版VAN、(2)取次の専門書流通改善の問題、(3)現在の書店状況、(4)大学生協の現況、(5)注文品の流れ、(6)出版VANと電子受注・発注、などであった。

二日目のケーススタディは「東海大学出版会」の中陣隆夫氏である。東海大学出版会は、重厚な海洋生物の図鑑等で知られ、現天皇もご執筆になる、『日本産魚類大図鑑』でも名高い。中陣氏は図表が盛り沢山の五〇枚にも及ぶペーパーをベースに個性豊かな論陣を張ったが、手持ちの時間ではとても処理しきれず、質疑事項は懇親会のバータイムに延長することによって、解消することになった。

ケーススタディは、法人認可前の国立大学系統の北海道大学図書刊行会と学校法人である東海大学出版会とでは、出版の企画から実現までの道程が、経営上の理念をふくめて、かなりの差異が生じてくるのではないかとのニュアンスを意識した組み合わせであった。各出版部のリーダーたちにそれなりの示唆を与えたことはいうまでもない。

時間が押せ押せになって、ホスト校の担当者もかなりのプレッシャーを感じたようであったが、五時すぎには幹事長総括の時間を持つことができた。山下正幹事長（東京大学出版会）が、大学出版部協会の今後の在り方に理念を吐露し、時代の変容に積極的に対応すべきであること、日韓合同セミナーをも含め国際交流には再考の余地があること、CD－ROMは産業界の課題でもある、また流通問題ではバーコードへの対応もおろそかにするべきではない、刊行助成にも甘えを排して厳しく対応策を講じるべきである、等で締めくくった。

最後の夜を盛大に盛り上げるべく、懇親会がもたれた。今回の研修会は、女性の参加が多く、慶應の永雄瑞子・産能の内田由美子・東海の末田博子・明星の丸山とも子・早稲田の中田雅与・名古屋の木和田志乃・関西の仁村万喜子・九州の伊藤麻里さんが参加したことは会の雰囲気に彩りと和やかさを加えた。

大学出版部ニュース

第13回「編集者の集い」にて

▼編集部会「第13回編集者の集い」大学出版部協会編集部会では、これまで、各大学出版部の編集者が共通に抱える課題について、懇談あるいは意見交換を行なうなど、親睦を兼ねた「編集者の集い」を重ねてきました。今回は「変わる編集、変わらぬ編集」という標題のもとに、①電子出版の概要、②電子組版とTEX（テフ、あるいはテックと読む）、③TEXによる編集の実際、をテーマに研究会を開催しました（10月14日、於・東京大学出版会）ところ、参加者は38名を数え、また、予定した時間を大幅に超えて熱心な質疑が続き、このテーマに対する各出版部の関心の高さがうかがわれました。

▼営業部会「第4回地域研修会」営業部会では、昨年10月13日～15日にかけて「第4回地域研修会（関西地区）」を行ないました（参加者18名・16大学出版部）。書店訪問のほか、京都産業大学図書館、大阪大学生命科学図書館、近畿大学中央図書館を訪問して、協会加盟出版部刊行図書の「見計い納品」について理解を得ることが主な目的でしたが、いずれの大学図書館でも、快く話をきいていただくことができました。

北海道大学図書刊行会

▼石城謙吉・福田正己編著『北海道・自然のなりたち』（四六判・一八五四円）。南仏カンヌと同じ緯度にありながら北海道の厳しい冬の寒さは、どこからくるのか。おおらかな北の大地は、どうしてできたのか。北と南の野生が共存する生物世界は、どのようにつくられたのか。不思議の島・北海道の自然史をわかりやすく解き明かしてくれる。

▼西浜雄二著『オホーツクのホタテ漁業』（A5・三〇九〇円）サロマ湖はホタテ栽培漁業の故郷であり、北海道における水産増殖の父・木下虎一郎の研究により始まった。そして今や、世界最高の栽培漁業にまで育った。本書は、発祥の地オホーツクを舞台に、その自然の成立ちを横糸に、人々の苦闘を縦糸にして織りなした、半世紀にわたるホタテ栽培漁業の発展史である。

聖学院大学出版会

▼W・パネンベルク編著、大木英夫・近藤勝彦他訳『歴史としての啓示』（定価三二〇〇円）

▼神の啓示を客観的な歴史的事実の中に見ようとする「歴史の神」の立場を明確にした論争の書。啓示を超歴史的なものと理解する立場（バルトを含む）と実存論的にとらえる立場（ブルトマン）に対して、創造から終末にいたるまでの普遍的な歴史過程全体が啓示の場所であるとし、啓示は神が「直接的に自己を顕示する」ものではなく、歴史過程において「間接的に自己を啓示する」と主張する。

▼二十世紀ドイツ神学界が生んだ最後の巨匠、W・パネンベルクの名著。

▼また、金井信一郎著『社会改革への道五十年』（A5判上製函入り・予価四八〇〇円）も現在進行中です。

慶應通信

▼慶應義塾大学経済学部／(財)経済広報センター共編『現代産業の再構築』(定価二七〇〇円)わが国産業の各部門を代表する第一線の経営者・技術指導者十七氏による「現代産業論」の講義(慶大経済学部)の内容を詳細に収録した。産業の空洞化、国際化、その他多くの緊急な課題に対する取り組みと将来の展望への、示唆に富んだ分析と提言を行っている。

▼慶應義塾大学経済学部環境プロジェクト編『地球環境経済論(上)』(定価二八〇〇円)同大学経済学部における講義をもとに編集。その上巻である本書は、現在、地球環境に起こっている現象とその発生メカニズムを、十一人の専門家が個々の具体的問題について詳細に解説した(下巻では、社会・経済システムの在り方の問題を論ずる)。

産能大学出版部

▼日本の行政の中枢である官僚機構の深刻な病状が、最近やっと明らかになりつつある。『官僚が書いた官僚改革』(脇山俊著、一六〇〇円)は戦後五〇年間に積もったその歪みを、二八年を中央官庁のエリートとして霞が関に勤務してきた著者が綴る。日本が生まれ変わるための官僚機構の自己診断と処方箋。

▼一方、地方においても地方分権の時代にふさわしい、効率的かつ効果的な行政運営システムの確立が、各地方公共団体に求められている。『職員参加の目標による行政運営』(地方行政活性化研究会編、一九〇〇円)は、多くの民間企業で採用されている「目標による管理」を取り入れた、公共団体職員活性化マニュアルであり、具体的な行政運営事例を中心に、導入・推進をわかりやすく解説している。

玉川大学出版部

▼E・キンモンス／広田照幸訳者代表『立身出世の社会史―サムライからサラリーマンへ―』(四九四四円)近代日本における立身出世意識の変容と野心を持った青年層の歴史的展開を、思想史、経済史、教育史にまたがった広範な問題の中に位置づける。

▼浦田誠親著『アメリカの小さな大学町―クオリティー・オブ・ライフ―』(二四七二円)モンタナ州ミズーラという小さな大学町に滞在した著者の印象記。「生活の質」を大切に感じる人にお薦めの本。

中央大学出版部

▼藤本哲也著『Crime Problems in Japan』(二七八一円)産業化、都市化に伴う高い犯罪率に悩む欧米に比べ日本は比較的安全な社会を維持していると言われているが、様々な憶測はされながらも未だ明確な解答は得られていない。本書は日本の犯罪動向、犯罪問題、刑事司法制度等を論じた英語論文集。

▼白羽祐三著『安全配慮義務法理とその背景』(四三二六円)安全配慮義務法理(人の生命・身体及び健康等を危険から保護するよう配慮すべき義務)の問題は、現代法的な問題である。本書は判例法上の安全配慮義務論(契約責任)を関連する不法行為論、憲法論、労働法論、行政法論などにも言及し、本質論で解明することによって、(私法上の人権法理)生存権保障法理を構築せんとしたものである。

東海大学出版会

▼『さかなの街―社会行動と産卵生態』ジャック・T・モイヤー、中村宏治共著。

「さかなの街」に迷い込んだ二人が目にした魅力的で驚異に満ちた世界。魚類学者の究極のテーマである「社会行動と産卵」を、魚類生態研究者のジャック・T・モイヤー博士の解説と、水中カメラマンの第一人者中村宏治氏のカラー写真で紹介。

おもな内容は、魚類生態研究者の世界（魚の行動研究法、魚類行動学入門）、ブダイ類とベラ類の産卵生態、スズメダイ類（クマノミの生態）、キンチャクダイ類とチョウチョウウオ類、ネズッポ類、ハコフグ類ほか。（B5判／上製／二七二頁オールカラー／定価四九四四円）

▼〈同時新刊〉益田一・小林安雅著『日本産魚類生態大図鑑』（定価九七八五円）も好評です。

東京大学出版会

▼経済成長率の低下と急速な高齢化に対応するため、税制や年金制度の改革が行われようとしている。しかしこの大きな変革は、将来にわたり我々にとって公正で効率的なものなのだろうか。この点をふまえ「二一世紀に向けて財政システムのあるべき姿を構想する」のが『日本の財政システム―制度設計の構想―』（貝塚啓明・金本良嗣編、A5判・三六〇五円）である。

本書は「税制」と「行財政システム」の二つの視点を軸に、社会保障や地方分権、談合の問題等具体的な課題をおりまぜながら、日本の財政のシステム・アーキテクチャーを考察する。

これは野心的な試みであるが、本書の議論により、読者がシステム設計への新たな発想を生み出す契機となることを期待したい。

東京電機大学出版局

▼米国で動き出したスーパーハイウェイ構想は、マルチメディアやインターネットの言葉とともに世界中を席巻している。日本でも二〇一〇年までに光ファイバ網で各家庭をつなぐというが、ジャーナリスティックな側面ばかり話題である。

未来社会を語るとバラ色の夢と警鐘という二面がつきものであるが、その要素技術にもきちんと目を向けた出版を続けたい。通信に関する二点を紹介する。

▼山内雪路著『スペクトラム拡散通信』（定価二〇六〇円）昨年刊行して好評だった「ディジタル移動通信」の姉妹編で、次世代高性能無線システムとして注目されている。

▼村上伸一著『画像通信工学』（定価二五七五円）マルチメディアではいかに画像を速くきれいに送れるかが鍵である。

東京農業大学出版会

▼田村正人著『エコロジー入門』（定価一四〇〇円）

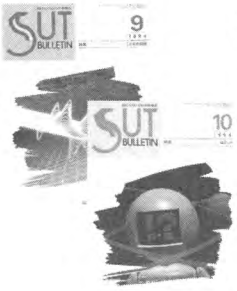
エコロジーという言葉は、ギリシャ語の「住み場所」と「法則」という二つの言葉からつくられた造語である。このような語原によって作られたエコロジーという言葉であるから、空間的な内容の広がりをみせたのであろうか。

本書は、著者が「生態学」つまりエコロジーのテキストとして著したものである。古くてなお新しいテーマである「生物と環境」、そして動物とくに昆虫がどのような行動をし、その行動の裏付けはいったい何か。バッタの大発生など、人間から見ると異常と見える集団の行動もある。

エコロジーは限りなく深い研究分野のようで、そこに興味が尽きることもないようだ。

東京理科大学出版会

▼明日をひらく科学教養誌――『SUT BULLETIN』



▼9月号は「ことばの科学」を特集。心理学と言語学、生理学と物理学、通信工学や情報工学とも関わるこの学際的なテーマを平易に解説しています。

▼10月号の特集は「ロボット」。産業用マニピュレータとしてのロボットはもとより、科学者が夢みる人工生物まで、ロボット技術の最先端を紹介しながら、哲学的・倫理的問題をも読者に問いかけます。

年間購読料（12回）五八〇〇円

法政大学出版局

▼任展慧著『日本における朝鮮人の文学の歴史』（八〇三四円）が、第48回毎日出版文化賞の奨励賞に選定されました。李樹廷による聖書翻訳から金史良の日本文壇登場まで、民族的差別と抑圧のもとで達成された多彩な作品群をはじめて体系づけた本書は、きわめて地道な作業のつみ重ねによって生み出された著作であるだけに、著者はもとより、私たちにとっても〈奨励〉賞のもつ意味はきわめて大きなものがあります。

▼また、第9回梓会出版文化賞にひき続いて、〈叢書・ウニベルシタス〉が、第30回日本翻訳出版文化賞を受賞しました。「書物による大学・思想と文化の宇宙」をめざす当翻訳シリーズのあいつぐ受賞は、小局の今後の出版活動にとって、なによりの励ましとなるものです。

放送大学教育振興会

▼放送大学教育振興会で取り扱っている「ビデオ教材」は、現在放送大学の授業科目ビデオ65教材ならびに特別講義ビデオ89教材、文部省放送教育開発センターの制作した教師教育ビデオ93教材と高専用ビデオ7教材と公開講座『計測と制御』のビデオ教材がある。

▼販売先は、国公私立大学をはじめ、教育機関、地方公共団体、民間企業などである。高専用ビデオ教材「新素材5教材、生命科学、基礎生物」などは大学・短大・民間企業の研究所などで特に興味と関心を呼んでいる。

▼平成5年度の販売ベスト5はいずれも放送大学特別講義であり次の通り。『酸性雨』、『太陽エネルギーを利用する』、『熱帯多雨林の生態』、『情報通信技術の歩み』(1)のろしから再び光へ）(2)光・衛星・ディジタル）。

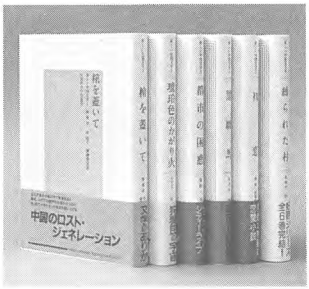
明星大学出版部

▼高島秀樹・神山敬章編『現代社会教育の課題』

本書は、四部から構成され、第Ⅰ部では現代日本社会の実態とその中における社会教育の基本的な課題、そしてさらに社会教育理論・行政・社会教育計画の三点について、第Ⅱ部では社会教育事業の課題を対象者の現代的特性や、そのおかれている社会状況について、第Ⅲ部では、代表的な社会教育施設を取り上げその実態とあるべき姿について、また第Ⅳ部では、総合的により具体的な社会教育の実践の方法を取り上げ考察している。

本書は、社会教育の第一線で活躍されている著者にご執筆いただくことにより、社会教育、社会教育行政などのあるべき姿を鮮明にし、大学の社会教育課題研究のテキストとして活用できる書として上梓された。

早稲田大学出版部



▼「新しい中国文学」（全6巻）が、第30回（一九九四年度）日本翻訳出版文化賞を受賞しました。①棺を蓋いて（陳建功・二四〇〇円）、②琥珀色のかがり火（ウロルト・二四〇〇円）、③都市の困惑（崔紅一・二四〇〇円）、④黒駿馬（張承志・二四〇〇円）、⑤初恋（池莉・二六〇〇円）、⑥縛られた村（朱暁平・二六〇〇円）。

文化大革命以降の中国を鮮烈に描きます。この機会にセットでのご購入をお薦めします。

京都大学学術出版会

▼初めてこれまでのつけあわせ校正だけでなく、本づくりの最初から担当することになった。もちろん、扉や目次やまえがきや写真のレイアウトなどの難しいところは今回は教えてもらいながらやるとして、原稿校正はまかされた。指針は①主語と述語が対応していること、②漢字、かなづかいを統一させること、③同じいいまわしを避けて、④文章の流れをスムーズにすることであった。①と②の訂正がかなりの量で手間取った。文章というのは書くことも、手直しすることも難しいものである。また、附録として年表と家系図があり、家系図は重複している人物を整理してすべて書き直した。一冊の本には、でき上がりからは見えない多くの作業があることを実感した。

名古屋大学出版会

▼森田勝昭著『鯨と捕鯨の文化史』、黒田明伸著『中華帝国の構造と世界経済』、毛里和子著『現代中国政治』の三作が、それぞれ毎日出版文化賞、サントリー学芸賞、アジア・太平洋賞を受賞した。▼いずれ劣らぬ力作として世に送り出したものだが、やはり（あるいは、それだけになおさら）賞をいただけたことは、この上ない励ましである。▼これまでにも小会は幾つかの出版賞に恵まれ、それによって支えられるところ大であった。しかし、今回のように三つ立て続けに受賞したのは、もちろん初めてである。いささかお恥ずかしい話だが、社内は一時お祭り騒ぎとなった。▼今後とも厳しい出版事情は変わるまいが、こうした励ましを受けとめられるような本作りを更に幅広く展開して行きたいものである。

大阪経済法科大学出版部

▼本多淳亮・村下博他著『外国人労働者問題を斬る』（仮題）

「ボーダレス」、「国際化の時代」と猫も杓子もなのだが、その内実は極めてお寒い我日本国なのである。選良たちの御放言や、相撲協会から入管あるいは善良な国民による御親切な無言の警告や、路上での小刃傷沙汰、これら暇なき「他者」に対する憂慮すべき事態に、手をこまねいてばかりもおられまい。知の力も一役買わねばならないだろう。

本書は、我国をはじめとして全世界に澎湃として起ってきている外国人労働者問題を、法律、経済、社会、教育等様々な角度からズバッと斬り、閉鎖、排除的なシステムに風穴を開けんとする意欲作である。又、斬られて痛みを感じれば、格好の健康チェックともなろうか……？

関西大学出版部

▼大西　昭男著『見ようとする意志―ヘンリー・ジェイムズ論―』（定価七〇〇〇円）「われら醜類、それがなんと美しい生きものであることか！」と処女作『ロデリック・ハドソン』の視点人物につぶやかせたヘンリー・ジェイムズはおぞましく、そして美しい人間というものの神秘の奥まで見届け、見定めようとしていた。「見る」ことにより「生きる」ことを貫いたジェイムズ文学の全貌に迫る力作。「論」「考」「解」の三部構成。

▼大石　裕訳『ニュースメディアと世論』（定価一五〇〇円）テレビ政治時代と呼ばれる現在、本書は従来の政治コミュニケーション研究の成果を踏まえつつ、すぐれて現代的な視点からマスコミと世論の関係の問題に取り組む話題作といえる。日本図書館協会選定図書。

九州大学出版会

▼村上芳夫『アメリカにおける広域行政と政府間関係』（九三年十月刊）は、「アメリカ合衆国における広域行政、とりわけ自治体政府間の調整の担い手の一つである「広域協議会」の役割と機能を明らかにしようとした労作である」として、第20回「東京市政調査会藤田賞」を受賞。

▼『諸宗教の倫理学』の第3巻『健康の倫理』を、第1巻『性の倫理』に続いて刊行。「今後の予定としては、第5巻『環境』を訳出するつもりである。ただ訳者たちの独自の研究課題もあり、そのため翻訳の仕事が捗らないとしてもご容赦願いたい」（訳者あとがき）。全五巻。

▼池永満（弁護士・患者の権利法をつくる会事務局長）『患者の権利』。「患者の権利宣言案」発表十周年を記念して、起草委員であった著者が率直に語る。

流通経済大学出版会

▼流通経済大学と、中国を代表する物的流通の専門大学である北京物資学院とは、かねて姉妹提携の関係にあるが、流通経済大学創立三〇周年記念事業として、昨年来から両校間で「中国における物流の現状と課題」について共同研究を実施している。その成果を、平成七年十一月に「中国物流事情調査研究」と題して、当会から出版する。

内容は、中国の陸運・海運・空運やその法整備の問題など中国物流の全般にわたるもので、日中両国の研究者が共同で、市場経済化を急ぐ中国の物流について、総合的に考及した著作は本邦では希少である。

大阪大学出版会

大学院重点化構想に伴って生ずる〝新象牙の塔〟の門扉を開くため、大学出版会はいかにその役割を担うか。大学でなされている先端科学の成果をわかりやすいかたちで市民に向けて公開する〝フロンティア〟シリーズ刊行はその試みの一つである。その第一弾が▼江尻宏泰・櫛田孝司編『量子の世界―物理研究のフロンティア』B5変型判・二一六頁・定価二六〇〇円。

▼本城正徳著『幕藩制社会の展開と米穀市場』A5・四五〇頁・定価六〇〇〇円。近世中・後期から近代資本主義社会に至る経済構造の変化は、生産力理論による理屈ばかりが先行し、実証的分析はほとんどなされていなかった。本書は、基軸的商品＝米穀の市場を豊富な史料に基づいて精密に分析し、幕藩制社会変容の姿を初めて捉えた成書。

新刊案内 '94・10〜'94・12

（表示価格は税込みです）

■北海道大学図書刊行会

北海道・自然のなりたち　石城謙吉・福田正己編著　一八五四円
細胞診の手引　井上勝一・中村仁志夫編著　七七二五円
性と生―生きものにみる男と女―　北海道大学放送教育委員会編　一八五四円
子どもたちの風景　北海道教育大学公開講座委員会編　二〇六〇円
サイロ博物館　新穂　栄蔵　一四四二円
A Recent Advance in Time Series Analysis by Maximum Entropy Method－Applications to Medical and Biological Sciences－　斎藤和雄監修　一五四五〇円

■聖学院大学出版会

アジアの問いかけと日本歴史としての啓示　W・パネンベルク編著　三二〇〇円

■慶應通信

社会人のための自学自習のノウハウ―大学通信教育の実例―　関根　徳男　一〇〇〇円
近代日本社会調査史(Ⅲ)　川合隆男編　三九〇〇円
地球環境経済論〔上〕　慶應義塾大学経済学部環境プロジェクト編　二八〇〇円
徳倫理学の現代的意義〈日本倫理学会論集29〉　日本倫理学会編　三八〇〇円
刑事法講義ノート　園田　寿・荒川雅行・井田　良　二五〇〇円
陸の王者慶應―体育会名勝負ものがたり―　池井　優　三〇〇〇円
アジア・太平洋新秩序の模索　慶應義塾大学地域研究センター編　一二〇〇円
ドイツ金融資本と世界市場〈慶應義塾大学商学会商学研究叢書18〉　赤川　元章　五五〇〇円

■産能大学出版部

超価格破壊と「製・配・販」同盟　高谷　和夫　一五〇〇円
官僚が書いた官僚改革　脇山　俊　一六〇〇円
サクセス・ブック　滝口陽子・稲垣行一郎　一五〇〇円
職員参加の目標による行政運営　地方行政活性化研究会編　一九〇〇円
夢は本当の自分に出会う日の未来の記憶である　中島　淳一　一五〇〇円
価格破壊時代の卸売業・小売業の業革　波形　克彦　一六〇〇円
在庫破壊　中井　久史　一六〇〇円
超マーフィーの法則　P・ディクソン／川勝　久訳　一五〇〇円
奇跡の実現　政木　和三　一五〇〇円
PL法と警告表示・カタログ・広告表現　梁瀬　和男　二〇〇〇円
ビッグスリー・GMの逆襲　押川　昭　一六〇〇円
平成七年度・節税と税金対策のすべて　東　勇幸　一六〇〇円
マーケティング・スペシャリティ企業の時代　北岡　俊明　一五〇〇円

■玉川大学出版部

アメリカの小さな大学町―クオリティー・オブ・ライフ―　浦田　誠親　二四七二円

大学経営と社会環境―大学の効用〔増補第三版〕　C・カー／箕輪成男・鈴木一郎訳　二四七二円

教育交流論序説　井上　雍雄　二八八四円

歴史の転換を生きて―この五十年―　河部　利夫　二八八四円

大学のアメリカ・モデル―アメリカの経験と日本―　江原　武一　二八八四円

■中央大学出版部

「地域労働市場」の変容と農家生活保障―伊那農家10年の軌跡から―　中央大学経済研究所編　三七〇八円

Crime Problems in Japan　藤本　哲也　二七八一円

英和対訳　英国憲法史の解説　須郷登世治　五一五〇円

検証　現実主義―国際関係のおとし穴―　モジュタバ・サドリア　二五七五円

安全配慮義務法理とその背景　白羽　祐三　四三二六円

■東海大学出版会

つまりは書生―周一良自伝―　藤家禮之助　二八八四円

日本の哺乳類　阿部永監修　三九一四円

地表環境の地学―地形と土壌―〈新版地学教育講座⑨〉　地学団体研究会編　二五七五円

星の位置と運動〈新版地学教育講座⑪〉　地学団体研究会編　二五七五円

ルネサンスの音楽〈プレンティスホール音楽史シリーズ②〉　ハワード・ブラウン／藤江効子・村井範子訳　六一八〇円

現代ドイツ成人教育方法論　三輪　建二　七六二二円

道信中将集・実方朝臣集・右京大夫家集〈桃園文庫影印叢書〉　稲賀敬二解題　二二六六〇円

オージンのいる風景　大塚光子・菅原邦城訳　五一五〇円

Environmental Management of Groundwater Basin　水収支研究グループ編　六六九五円

PC―SASによる基礎統計学入門　新城　明久　二八八四円

海水エネルギー　鈴木　正弘　三〇九〇円

慢性腎不全、狭心症、高血圧に対するASTの臨床効果に関する研究　鈴木正弘編　二〇六〇円

■東京大学出版会

講座現代アジア2―近代化と構造変動　中兼和津次編　三九一四円

長期社会変動・アジアから考える6　溝口雄三ほか編　三〇九〇円

日本のしつけと教育・シリーズ人間の発達12　東　洋　二四七二円

情報処理入門―MS-DOS TurboPASCAL Lotus 1-2-3　山口　和紀　一八五四円

「世界都市」東京の構造転換―都市リストラクチュアリングの社会学　町村敬志　四九四四円

都市空間の社会理論―ニュー・アーバン・ソシオロジーの射程　吉原　直樹　四三二六円

内発的発展と外向型発展―現代中国における交錯　宇野重昭・鶴見和子編　二九八七円

建築家のドローイング　香山　壽夫　三六〇五円

地震と断層　島崎邦彦・松田時彦編　三五〇二円

China's Republican Revolution　衞藤瀋吉・Harold Z. Schiffrin 編　七〇〇四円

Circumpolar Religion and Ecology―An Anthropology of the North　煎本　孝・山田孝子編　九〇六四円

帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇73・74
国立国会図書館所蔵　各一六四八〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇55
国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
枢密院会議議事録73・昭和篇31　国立公文書館所蔵　一四四二〇円
アメリカと日本・東京大学公開講座59
吉川弘之著者代表　二四七二円
講座現代アジア3―民主化と経済発展　萩原宜之編　三九一四円
情報社会と現代日本文化―社会学シリーズ　川崎賢一　四五三二円
ジェンダーの日本史（上）・宗教と民俗／身体と性愛
脇田晴子、S・B・ハンレー編　八八五八円
秀吉権力の形成―書札礼・禁制・城郭政策　小林清治　七〇〇四円
中世イギリス財政史研究　城戸　毅　七七二五円
オーストリア＝ハンガリーと少数民族問題
―クロアティア・セルビア人連合成立史　月村太郎　六一八〇円
変革期の金融システム　貝塚啓明・植田和男編　三六〇五円
講座現代アジア4・地域システムと国際関係
平野健一郎編　三九一四円
ドイツ現代政治　平島　健司　二二六六円
近世の豪農と村落共同体　渡辺　尚志　五一五〇円
日本帝国主義史3―第二次大戦期　大石嘉一郎編　七六二二円
日本の財政システム―制度設計の構想
貝塚啓明・金本良嗣編　三六〇五円
現代家族と社会保障―結婚・出生・育児
社会保障研究所編　四五三二円
日本のシダ植物図鑑7　倉田　悟・中池敏之編　一五四五〇円
東アジアの形態世界・東京大学コレクション
青柳正規・西野嘉章編　二八八四円

帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇77・78
国立国会図書館所蔵　各一六四八〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇57
国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
枢密院会議議事録75・昭和篇33　国立公文書館所蔵　一四四二〇円

■東京電機大学出版局
たのしくできるやさしいディジタル回路の実験
白土　義男　二〇六〇円
画像通信工学〈理工学講座〉　村上　伸一　二五七五円
教師のためのコンピュータQ&A〈教育とコンピュータ〉
秋冨　勝　二二六六円
スペクトラム拡散通信―次世代高性能通信に向けて
山内　雪路　二〇六〇円
アプリケーションエンジニアのための会計システム入門
小宮山登志雄　二八八四円
初めて学ぶ接続・接合技術―ろう付・はんだ付
田中政直・岩下行徳　三二九六円
Mathematica ハンドブック　川瀬宏海他訳　六〇〇〇円
教師のためのパソコン〈教育とコンピュータ〉
若山芳三郎　二五七五円
学生のための一太郎　若山芳三郎　一一八五円
学生のための Lotus 1-2-3　若山芳三郎　一七五一円

■東京農業大学出版会
エコロジー入門　田村　正人　一四〇〇円

■東京理科大学出版会

■法政大学出版局

シェリング読本　西川富雄監修／高山・長島・藤田・松山編　三〇九〇円

スパルタクスとイタリア奴隷戦争　土井正興　一一九四八円

読みの快楽―イデオロギーの時代における―　R・オールター／山形和美・中田元子・田中一隆訳　三五〇二円

ムージル読本―別の人間を見出すための試み―　A・フリゼー編／加藤二郎・早坂七緒・赤司英一郎訳　三〇九〇円

ローマの祭―夏と秋―　G・デュメジル／大橋寿美子訳　四六三五円

政治と精神分析　G・ドゥルーズ、F・ガタリ／杉村昌昭訳　一六四八円

自然契約　M・セール／及川馥・米山親能訳　二三六九円

クロポトキン伝　ピルーモヴァ／左近　毅訳　三九一四円

年齢意識の社会学　H・P・チュダコフ／工藤政司・藤田永祐訳　三五〇二円

ウィトゲンシュタイン評伝―若き日のルートヴィヒ―　B・マクギネス／藤本・今井・宇都宮・高橋訳　五九七四円

転換期―ドイツ人とドイツ―　H・マイヤー／宇京早苗訳　四五三二円

象徴と社会　K・バーク著／J・R・ガスフィールド編／森常治訳　五九七四円

カント哲学の諸相　浜田　義文　五九七四円

現代日本官僚制の成立　岡田　彰　五一五〇円

初期ギリシア科学―タレスからアリストテレスまで―　G・E・R・ロイド／山野耕治・山口義久訳　二四七二円

宗教論―現代社会における宗教の可能性―　N・ルーマン／土方昭・土方透訳　一六四八円

女流誕生―能楽師津村紀三子の生涯―　金森　敦子　二四七二円

神々を作る機械―社会学と心理学―　S・モスコヴィッシ／古田幸男訳　七二一〇円

ロマン主義と表現主義　A・K・ウィードマン／大森敦史訳　三九一四円

■放送大学教育振興会

■明星大学出版部

■早稲田大学出版部

修辞学の史的研究　原　子朗　三六〇〇円

科学哲学27　特集・量子力学と物理的実在　日本科学哲学会編　二〇〇〇円

スポーツにおける当事者関係の特質〈日本スポーツ法学会年報第1号'94〉　日本スポーツ法学会　四五〇〇円

お伊勢山遺跡の調査　第5部　鎌倉時代から江戸時代　早稲田大学所沢校地文化財調査室編　一九二〇〇円

早稲田大学演劇博物館所蔵　芝居絵図録3　忠臣蔵　下　六〇〇〇円

早稲田大学蔵資料影印叢書　国書篇第三期　第37巻　能楽資料集二　竹本幹夫編　一八〇〇〇円

早稲田大学蔵資料影印叢書　洋学篇第一期　第5巻　大槻玄沢集Ⅱ　杉本つとむ編　二八〇〇〇円

■名古屋大学出版会

デューイの探究教育哲学―相互成長をめざす人間形成論再考―　早川　操　五六六五円

流通の経済理論―情報・系列・戦略―　成生　達彦　五六六五円

最初の経済学体系　小林　昇　二五七五円

結核の文化史―近代日本における病のイメージ―　福田　眞人　四六三五円

■京都大学学術出版会
Japanese Grammer : A New Aproach　清瀬義三郎　四二〇〇円

■大阪経済法科大学出版部
おもしろい中国語　雷　建　徳　一四〇〇円
中国語　一字の本　雷　建　徳　一〇〇〇円

■関西大学出版部
近世俳書集―関西大学図書館影印叢書　第一期第四集―　乾　裕幸編　一三〇〇〇円
国際債権法の動向　本浪　章市　一〇〇〇〇円
見ようとする意志―ヘンリー・ジェイムズ論―　大西　昭男　七〇〇〇円

■九州大学出版会
自動車ディーラーの日米比較―「系列」を視座として―　塩地　洋&T・D・キーリー　二八八四円
筑後川の農業水利―水利集団の法社会学―　江渕武彦編著　二八八四円
諸宗教の倫理学―その教理と実生活―第3巻　健康の倫理　クレッカー&トゥヴォルシュカ編／花田伸久監修　二五七五円
患者の権利　池永　満　二五七五円
二十一世紀をめざす世界の教育―理念・制度・実践―　権藤與志夫編著　三二九六円

■流通経済大学出版会

■大阪大学出版会
量子の世界―物理研究のフロンティア―　江尻宏泰・櫛田孝司編　二六〇〇円
幕藩制社会の展開と米穀市場　本城　正徳　六〇〇〇円

第十三回「日韓大学出版部セミナー」俗離山で開催

去る十一月十日、十一日の二日間、今回で十三回を迎える「日韓大学出版部セミナー」が開催された。大学出版部協会からは、山下正団長以下総勢十一名の代表団が結成され、セミナーをはさんで五日間にわたり訪韓した。

俗離山で行われたセミナーでは、韓国大学出版部協会会長・金埔坤氏、日本大学出版部協会幹事長・山下正氏の挨拶に続き、日韓双方から次のような主題発表が行われた。

▼韓国側＝李　斗　暎（韓国出版協同組合専務理事）
「韓国の出版流通産業動向と大学出版図書の販売戦略」
▼日本側＝渡　辺　勲（東京大学出版会常務理事編集局長）
「日・韓大学出版部活動の共通項
――実りある交流の前提を探る」

こののち、山下正氏より「日韓大学出版部協会の新しい交流について」というテーマで具体的な提案がなされた。

また、訪韓中には建国大学校とソウル大学校を訪問し、ソウル市内の書店、国立博物館、板門店などを見学した。

次号では、渡辺氏よりセミナーの詳細が報告される。

（東海大学出版会・小野）

●製作の現場から　9

日本語大博物館見学の記

▼〈日本語大博物館〉に行って来た。徳川家康が駿府で鋳造させた銅活字や、カナタイプ、謄写版、邦文タイプ、写植機、ワープロのいずれも一号機、それらによって製作されたさまざまな印刷物を見ることができた。孔版の神様と呼ばれた草間京平の作品の前では、その美しさに思わず足がとまった。カナ文字論者たちの作り出した書体があまりにもモダンなのに息を呑んだ。さらに、こうしたハードやソフトを開発した人々の事績に、その風貌とともに接することができた。

▼といってもこの博物館、実在するわけではない。紀田順一郎著『日本語大博物館』の話なのだが、「読んだ」というより「見学した」というのがこの本にはふさわしい。豊富な図版、普通なら（某大学出版部なら？）モノクロで十分と考える写真にもぜいたくにカラーを使用して、印刷機のオイルの匂い、文献資料の古びた紙のなつかしい匂いまでも再現しているからだ。出版・印刷関係者にはぜひご一読を、否、「お出かけを」おすすめしたい。

▼副題に「悪魔の文字と闘った人々」とある。闘い方はさまざまだ。悪魔を一刀のもとに切り捨てようとした人々がいる。森有礼の英語採用論や志賀直哉のフランス語国語化論がそうだ。世界のどこにもない、全く新たな国字を発明してしまった人々の多さにも驚かされる。

▼悪魔の持てるものすべてを、自分のうちに取り込もうと闘った人々もいる。『大漢和辞典』の著者・諸橋轍次と、その字母＝五万字を書いた写研の創業者・石井茂吉が代表格だろう。二人の業績については、出版関係者なら一度や二度は耳にし、目にしたことがあるはずだが、それでもなお、これら先人たちの情熱には圧倒されざるをえない。

▼悪魔の文字であろうとなかろうと、それを表現する往時のニューメディア＝「活字」の魅力にとりつかれた作家たちも登場する。宮武外骨は関東大震災を速報する『震災画報』を自ら組んだ。江戸川乱歩は活字を少しずつ買い集めて同人誌『中央少年』を発行した。中里介山にいたっては、大作『大菩薩峠』の一、二巻を自分で組み、印刷し、製本（和綴じ）までしてしまったという。本欄に登場する「組版オタク」氏や「アップルパイ」氏など、およびもつかないのめり込み方である。

▼悪魔の文字を何とかてなずけることに成功したのがワープロの開発者たちだろう。彼らの努力によって、日本語の情報処理は革命を迎えた。しかし、それはあくまで「てなずけ」たのであって、悪魔を改心させ、天使に変えてしまったわけではない。ワープロの開発によって意義を失ったかに見えるさまざまな実験、試行錯誤と挫折のうちに、学ぶべきものは多々残されているはずだ。

▼紙数もないので例を一つだけ挙げておく。「一郎」という名前を仮名書きしてみてほしい。普通は「イチロウ」だが、実際には「ウ」をそれほどはっきりと発音するわけではない。「イチロー」ではさらに不自然だ。オリックスのMVP男の場合なら「カッセ・カッセ・イ・チ・ロー」となって調子がいいけれど…。カナ文字論者たちはこのような場合「イチロウ」と表記するようだ。本文中に解説されているわけではないが、図版を見る限りそうなっている。こうした発見が随所にあるのも、この〈博物館〉の魅力だろう。

▼版元はジャストシステム。同社のPR誌『MOA（モア）1』の連載に加筆したものだが、この雑誌はソフトのプレビューや利用法の間に、「おや」と思わせられるような記事が載っている。Mac版がないので私は使用したことがないが、同社のワープロソフト「一太郎」がベストセラーを独走している理由（わけ）が何となく理解できるといったら誉めすぎだろうか。

（半太郎）

ISSN 0913-3305

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362 埼玉県上尾市戸崎1－1 TEL. 048-725-0324 FAX 048-725-0324
慶應通信	〒108 東京都港区三田2－19－30 TEL. 03-3451-3584 FAX 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2－16－5 自由が丘サンビル TEL. 03-3724-9101 FAX 03-3717-4346
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園6－1－1 TEL. 0427-39-8935 FAX 0427-39-8940
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742－1 TEL. 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151 東京都渋谷区富ヶ谷2－28－4 TEL.03-5478-0891 FAX 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷7－3－1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町2－2 TEL. 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘1－1－1 TEL.03-5477-2562 FAX 03-5477-2643
東京理科大学出版会	〒162 東京都新宿区若宮町19 TEL. 03-3235-5692 FAX 03-3235-9632
法政大学出版局	〒162 東京都新宿区市谷田町2－14－1 TEL. 03-5228-6271 FAX 03-5228-6010
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門1－14－1 郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2－1－1 TEL. 0425-91-9979 FAX 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町1－103 TEL. 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-01 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX 075-761-6182
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺6－10 TEL. 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 大阪府吹田市山手町3－3－35 TEL. 06-388-1121 FAX 06-389-5162
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎7－1－146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX 092-641-0172
流通経済大学出版会(準会員)	〒301 茨城県龍ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011
大阪大学出版会(準会員)	〒565 大阪府吹田市山田丘1－1 大阪大学事務局内 TEL. 06-877-1614 FAX 06-877-1614

大学出版(第24号) '95冬 平成7年1月10日発行 発行所 大学出版部協会
〒113 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版会内 電話 03-3812-2111 (内)7954
頒布価格100円 〒共